

郷土博物館・文学館だより



展示室風景

前田政雄「代々木風景」



企画展「描かれた渋谷」

開催中！

当館では3月27日まで、館所蔵資料を中心に渋谷を描いた絵画を紹介する企画展「描かれた渋谷」を開催しています。

江戸の名所「金王桜」を描いた錦絵や、明治初期の渋谷川の様子を描いた「玉川家庭園屏風」などからは、かつての自然豊かな渋谷の姿、石井鶴三・前田政雄などの画家が描いた木版画からは、宅地化が進む戦前の渋谷の様子がうかがえます。そして最後に、未来の渋谷を描いた資料を紹介しています。

江戸・東京の郊外であった渋谷が、現在のような姿へと変化してゆく様子を、絵画資料を通してお楽しみください。



2月6日に行われた展示解説の様子

渋谷町水道の誕生

車で首都高速 3 号渋谷線を用賀に向かって走っていると、三軒茶屋あたりを過ぎてから右手前方に、西洋のお城のような円柱の構造物が二つ見えてくるのをご存知でしょうか。

この構造物は、世田谷区弦巻二丁目に所在する東京都水道局駒沢給水所の給水塔です。じつはこの給水塔、大正時代、渋谷町が創設した渋谷町水道のためのものでした。

明治末から大正・昭和のはじめにかけて、まだ渋谷は三町、すなわち渋谷町・千駄ヶ谷町・代々幡町に分かれていました。それぞれの町は、東京市に近く、また鉄道なども敷設され、人口が一気に増えていました。こうした人口増加によって、飲み水として使用していた地下水が枯れたり、水質が悪くなるなどの問題が出ていました。三町の中でも渋谷は特に顕著で、町民は水道の創設を待ち望んでいました。

渋谷町は、当初、東京市の水道拡張工事による配水を考えていたようですが、その計画も竣工が大正 12 年（1923）とだいぶ先であり、また町への配水も可能かどうか不明でした。そこで渋谷町は大正 6 年 10 月、単独で水道を整備することを決めたのです。

まず町会議員から委員を選出し、工学博士の中島鋭治（東京帝国大学名誉教授）に依頼して、水源地の踏査を実施しました。その結果、水源を多摩川とし、北多摩郡砧村字鎌田地先（現、世田谷区鎌田）から取水することになりました。

中島博士は日本近代上下水道敷設の開祖と呼ばれている方で、彼の設計案が採用され実現化されました。当時のお金で予算額・総工費 496

万円という一大事業で、大正 10 年に着工し、全工事が完成したのは大正 13 年でした。

工事はまず、多摩川の川底に「集水埋きよ」という装置を作り、川底を流れる伏流水（地下水）を採ります。それを河畔の砧浄水場（現、砧下浄水所）でろ過した後、ポンプで荏原郡駒沢村字新町（現、世田谷区弦巻）に設置した駒沢給水所内の給水塔に送り、そこから渋谷町の町内に自然流下で配水しました。水道の総延長は、渋谷町役場（現、東二丁目 20 番付近にありました）から水源まで 9,452m、給水量は一人一日四立法尺（約 110 リットル）を供給できるものでした。豊富な水量のため、渋谷町外からも給水の要請が相次いだようです。

給水塔のそばには、昭和 2 年（1927）に建立された「渋谷町水道布設記念碑」があります。その碑文からは、この事業がどれほど大変であったかをうかがい知ることができます。

やがて昭和 7 年 10 月、渋谷区が誕生するとともに周辺区も東京市に併合されたことで、渋谷町水道は東京市水道局に移管されました。

現在、この給水塔は駒沢給水塔風景資産保存会を中心に、大切に見守られています。



大正 11 年 配管工事中の宮益橋
（『施工中にある渋谷町水道』より）

江戸川乱歩の作品に登場する渋谷

江戸川乱歩の小説には、幻想、耽美、怪奇といった要素をあげることができ、代表作「押絵と旅する男」「屋根裏の散歩者」「人間椅子」などには、こうした要素が盛り込まれています。

その乱歩が少年ものに着手したのは、昭和11年(1936)1月号の『少年倶楽部』から連載がはじまった「怪人二十面相」でした。乱歩と少年雑誌の取り合わせは、当初まるでそぐわないものと受けとめられていたようです。しかし編集側は、大人で特殊能力のある名探偵・明智小五郎という主人公の起用が、少年探偵では満足できない読者の少年たちを熱狂させると確信していました。乱歩は、この年2月に起こった二・二六事件を自由主義や個人主義の没落の前兆ととらえ「耽美主義の如きは消えてなくなるべき時代」と創作意欲を失いかけていました。その時期に舞い込んだ『少年倶楽部』からの執筆依頼に、新境地を拓こうという意欲がわいたようです。

この「怪人二十面相」には、代々木の雑木林の中にぼつんと建つ家、実は二十面相の隠れ家が出てきます。部屋の畳の下には地下への隠し階段があり、地下廊下の鉄扉のむこうには本当の隠し部屋があります。奪われた観音像は、明智小五郎と少年助手・小林芳雄、そして少年探偵団の活躍で取り戻すことができます。このように、乱歩は、人気がなく物寂しい東京市の郊外として当時の代々木をえがいています。

同じく『少年倶楽部』に昭和13年1月号か

ら連載された「妖怪博士」には、登場人物の小泉信太郎邸が渋谷区桜丘町にあるという設定になっています。

ところで、明智小五郎と小林少年のコンビが初めて登場するのは、昭和5年9月から『報知新聞』に連載された「吸血鬼」でした。怪物のあとを追って麴町から青山まで追跡した明智は、代々木練兵場の西にある「まだ武蔵野の俵を残した、さびしい郊外」に画家・岡田道彦のアトリエを見つけ、そこにあった石膏製の裸婦群像の中から、3人の女性の死体を発見します。

乱歩の探偵小説には、東京の都市化という時代背景を見ることができ、神出鬼没の怪人二十面相もまた、都市から生まれたといえるでしょう。

乱歩は戦後も、昭和31年4月『オール読物』に掲載した「堀越捜査一課長殿」で、東和銀行渋谷支店で強盗事件を発生させたり、高級アパート「松涛荘」を登場させたりしています。

東京オリンピック直後の昭和40年、その後の渋谷の変化を見ることなく、乱歩は没しました。

江戸川乱歩
『少年探偵団』
ポプラ社

「少年探偵団」は昭和11年12月まで『少年倶楽部』に連載後、同年12月大日本雄弁会講談社から出版された。戦後、昭和39年からポプラ社版が出版された。





収蔵資料紹介

かくはん式洗濯機（東芝P型）

昭和29年製造

洗濯機の国産第一号機は、昭和五年（一九三〇）芝浦製作所（現在の東芝）が制作販売した「ソーラー」でした。しかし、この洗濯機は非常に高価で、ほとんど普及しませんでした。

日本で洗濯機が普及するのは戦後のことで、高度成長期に色んな方式の洗濯機が開発され販売されました。今回紹介する資料は、昭和二十七年に東芝が発売を開始した「P型」と呼ばれる洗濯機です。

洗濯機には、回転ドラム式、噴流式、渦巻式などの種類がありますが、P型は「かくはん式」です。洗濯機の本体中央底部に三枚の翼がついており、それが回転することで水流を作り出し、洗濯ができます。この方式は布地をいためないという長所がある反面、洗濯時間が長いという短所もありました。

実際にこの洗濯機を使った

経験者の話によれば、使用する際は、見ていないとすぐに水が溢れ出てしまい、排水にも時間がかかったといえます。さらに脱水機能も無いため、現在の洗濯機と比較しようもありませんが、冷たい水に手をさらして洗濯板を使った従来の洗濯方法に比べれば、はるかに楽だったそうです。

しかし、同じ時期に発売された「噴流式」の洗濯機が、短時間で洗濯でき、小型軽量で安価であるため、人気となり、「かくはん式」のP型は販売されなくなりしました。

その後、「噴流式」の改良型である「渦巻式」が洗濯機的主流となり、広く一般家庭に普及しました。

本資料は、約六十年前前に製造された洗濯機としては、驚くほど保存状態が良く、現存数が少ないため大変貴重です。

【今後の展示予定】

◆企画展「描かれた渋谷」

平成28年1月19日（火）～
3月27日（日）

◆企画展「第16回渋谷現代短歌優秀作品展」

平成28年4月1日（水）～
4月10日（日）

* 第16回渋谷現代短歌の優秀作品を展示します。

白根記念

渋谷区郷土博物館・文学館

SHIBUYA FOLK AND LITERARY SHIRANE MEMORIAL MUSEUM

開館時間 ◆ 11:00～17:00（入館は16:30まで）

休館日 ◆ 月曜日（休日の場合はその直後の平日）・年末年始

入館料 ◆ 一般:100円(80円) 小中学生:50円(40円)

※ 1日以内は10名以上の団体料金

※ 60歳以上の方 障害のある方と付き添いの方は無料

お問い合わせ ◆ 東京都渋谷区東1丁目9-1 TEL:03-3486-2791

郷土博物館・文学館だより vol.31
平成28年3月10日発行